

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「食事作法の起源」を考える (食事マナーの変遷と比較)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野林, 厚志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5575

「食事作法の起源」を

考える

野林 厚志

(のばやし あつし)

現職◇国立民族学博物館助手

専門領域◇民族考古学

著書◇『台湾原住民研究への招待』（共著）、『住まいにいきる』（共著）ほか

一、「起源」を とりあつかう困難さ

この小稿を起こすにあたり、私に与えられた最初の課題は、「食事作法の起源」と「食事マナーの起源」というものであった。いき

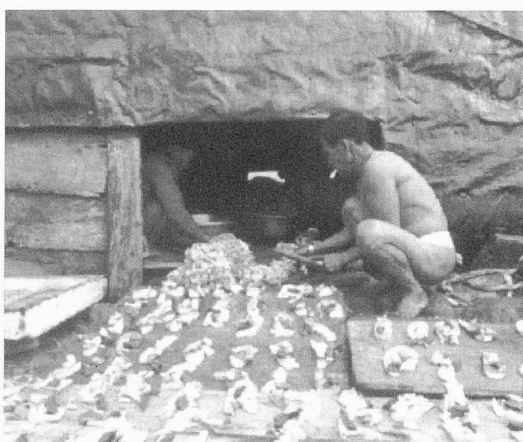
なり、「作法」と「マナー」という異なる言葉、起源というつかみ所のない問題をどう取り扱ってよいか正直いつて見当がつかなかったのである。字義はともかく、「作法」と「マナー」とを明確に線引きすることは不可能であろう。かといって、それが全く同一であるとも言えない。この問題を検討することはさしあたり筆者の能力の範囲を超えていた。ただ、熊倉功夫氏がその著書の中で、マナーとは社会関係を円滑に作動させ

るためのルールであり、社会の秩序を維持するためのシステムであると説明していることは一つのがかりになる。マナーという大きな枠組みが社会のシステムとして存在し、それを実践するための方法として作法というものが存在するということをここでは想定しておく。

次にやっかいなのが、「起源」の問題である。そもそも食事作法の起源という漠然とした問題を簡単に扱えるわけがない。まず、問題外の外とまでいえる浅薄な態度は、いわゆる「周辺」に位置する社会で観察される現象が「原始性」を想起させ、それらが起源をひもとく鍵と見なす考え方である。それぞれの社会はそれぞれの固有の食文化をはぐくんできたことは言うまでもない。歴史学は、あくまでそうした個々の社会に

おける食事作法の起源を検証することは可能である。一方で、食事作法の起源そのものを論ずることは不可能であろう。では、霊長類の食行動は、食事作法の起源をひもとくのに役立つのであろうか。もちろん、役に立たないことはない。しかしながら、最も犯しやすい過ちは、霊長類の一面的な行動の観察から初期人類の行動を類推するというものである。現生人類に最も近いといわれているチンパンジーも実は、人類との共通祖先から六〇〇万年の歳月を進化してきたということははっきりと認識しておかなければならない事実である。

つまりは、食事作法の起源などというテーマは個別の事例を取り扱わない限り、非常にアプローチするのが困難な問題なのである。当然、こうした常識的な前提は踏ま



ヤミの肉の分配は徹底した均等化がはかられる(写真提供:野林厚志)

えた上で、あえてこの課題が与えられたと解した筆者は非常に困ったのである。そんな筆者にいくばくかの糸口を与えてくれたのは、石毛直道氏の次のような言葉であった。「それぞれの文化において、食物の場の性格(公的な食事か私的な食事かなど)、使用する食器の種類、食事に参加する者の社会的地位や年齢、性別などに応じて、ふるまうべき食事作法といったものが定まっており、それらの作法の成立の背景には歴史や宗教が見えかくれするものであり、食事作法というものは文化ごとにことなる複雑な様相をしめしている。——中略——

食事作法の根源は食物の分配に関するル

ールから生じているのであろう。」

最後に指摘されている、食事作法と食物の分配に関するルールとの関係は筆者に逃げ道を与えてくれた。すなわち、食事作法が発生する要因に食物の分配という問題が存在するということである。これは、食事作法の起源を食物の分配の起源という問題に置き換えて考えることが可能であるということを意味している。ここで留意すべきことは、食物の分配には、経済的活動と社会的活動との二つの側面があるということである。アメリカ北西海岸のインディアンに見られるようなポトラッチや、筆者が調査してきた台湾ヤミ族が船や家屋の建造祭においてくりひろげる饗宴は、社会的な相互作用の媒介として使われると考えてよいだろう。一方で、食物が食欲を満たすものとして機能する分配はライオンやチンパンジーといった様々な野生動物にも数多く見られる現象である。

二、分配の場を考える

—ホモ・ハビリスの採食行動

分配という行為を、経済的機能のみに限定されたものとしてとらえるか、それとも社会

的機能をふくんだものとしてとらえるかということを考えるうえで、重要であると思われる要素の一つが分配の場である。すなわち得られた食物資源を、ある特定の場所に運ぶのか、それともその場で消費するのかわくは、分配という明確な目的に対し、ずいぶん異なる行動となるからである。実はこうした食糧の消費地に関わる問題は、人類進化における行動モデルの論争の重要なテーマとなってきた。

初期人類の行動に関わる具体的なモデル提示の先鞭をきったのが、グリーン・アイザックのホームベースモデルである。彼は、二〇〇万年前から一五〇万年前の遺跡の多くで、おびただしい数の石の人工物と骨片とが集積してみつかる状況を、根拠地の証拠であるとしてとらえ、遺跡を利用した初期人類が、食物を分配したり幼児の世話をしていたと考えた。実際、東アフリカのオルドヴァイ峡谷のある遺跡では、四万点余りの骨片と二千以上の石の人工物が見つまっている。この時代の石器は、一般にオルドヴァイ型人工物とよばれ、その作り手は地上に初めて出現したホモ属であるホモ・ハビリスと考えられている。

ホモ・ハビリスの食生活に一定して多量の

肉が含まれていた可能性は高い。ホモ・ハビリスの脳容量はアウストラロピテクスに比べ非常に大きいことは化石資料から検証されている。身体の中で最も消費カロリーが高い器官といってもよい脳は、その容量を増大させることによって、身体に残りの器官が消費するカロリーをより低くすること、カロリーをより効率よく摂取できる高品質の食品の摂取を促がす。すなわち、より小さい内臓をもち、かつそこで処理できる肉を食べることによって、彼らは生存することが可能となったという考え方である。

アイザックの中心地モデルは、現生の狩猟採集民、とりわけアフリカのバンド社会を基盤とした狩猟採集民の社会形態に明らかに影響を受けていた。彼らは、ホームベースから狩猟活動を行うための遠征を主として男性が行ない、獲得した肉の一部をホームベースに残る女性や幼児を中心とした他の成員に運ぶのである。

一方、アイザックの中心地モデルに反論ののろしをあげたのが、ルイス・ビンフォードであった。ビンフォードはアフリカの初期人類の遺跡に、大量の肉が運び込まれたり摂取されたりした証拠はないと主張した。ビンフォードは、自ら民族考古学を実

践し、現生の狩猟採集民が狩猟および消費活動によって遺していく遺物がどういった属性をもつものかを知っていたこと。ビンフォードは、オールドヴァイの化石資料の分析結果は、アラスカのヌナミウトが狩猟および消費活動によって、残す遺物のパターンよりも、イヌやオオカミによって残される遺物のパターンに近いことから、ホモ・ハビリスは、イヌやオオカミによって食べ残された動物の屍骸をあさる、いわゆるスカベンジャーであったと主張したのである。つまり、動物の食べ残しにありつくホモ・ハビリスは、大量の肉を摂取することなど不可能であったというのである。ビンフォードの説には、食物の分配などという悠長なことは含まれていない。文字通り、同種間で屍肉を奪い合う競争さえあったということになる。

二人の論争は、アイザックの弟子やビンフォードの支持者によって引き継がれ、ホームベース説とスカベンジャー説を補足する新しいモデルも少なからず提示されてきた。にもかかわらず、ホモ・ハビリスの食物摂取行動については明確な結論が出されてはいない。ただいえることは、その時々々の生態環境に適応しながら、狩猟をしたり屍肉をあさったり、

食物を分配したり、個人個人で食物を収集していたのであろうということである。つまり、食物の獲得に際して、特化した方法を持ち合わせていなかったとも考えられる。このことは、ある一定のきまりごとを前提とする作法やマナーの存在を保証するものではない。とりわけ、社会的な関係を規定するための食事作法やマナーの存在は考えにくいということになる。

三、逆境に生きる —ネアンデルタールの食行動

前章で紹介したホモ・ハビリスにつづく化石人類は、ホモ・エレクトゥスである。しかしながら、ホモ・エレクトゥスの食行動に関する議論は、ホモ・ハビリスよりも熱を帯びたものではなかった。次に人類学者が熱いまなざしを送っているが、進化の一つの枝として絶滅したと考えられているネアンデルタール人である。

ネアンデルタール人が、氷床に覆われたヨーロッパの厳しい環境に生きたことは注目される。同じような極北の環境に生きるイヌイットのような狩猟民が、どのような適応戦術をとっているかを考えることは、

ネアンデルタールの生活を知る上で、幾許かの手がかりを与えてくれるだろう。自然界に関する詳細な知識、集団間、内に存在する社会的相互関係、高度に複雑なテクノロジーなどである。狩猟具一つをとってみても、例えば、イヌイットの用いる海獣狩猟の道具は二〇以上のユニットに分かれた複雑な構造をしていることが知られている。すなわち、人類が極北のような環境で生きぬくためには、相当の条件が必要になるということである。

イギリスの先史考古学者、ステイヴン・ミズンはこれに対する答えを三つ用意している。一つ目は、彼らが大集団で住み、個人あるいは下位集団で食物収集をした時に食物を確保しそこなう危険を軽減していたこと。二つ目は、彼らがとにかく働いたということ。三つめは、ネアンデルタール人が、自分たちの環境とそこにいる動物について精緻な理解力をもっていたということである。ミズン自身は三つ目の問題に深い関心を寄せているが、食事作法の起源問題を考えるうえでは、もちろん一つ目の問題が重要となることはいうまでもない。分配はいかに考えられ、実践されていたかということである。これに一つの解答を与え

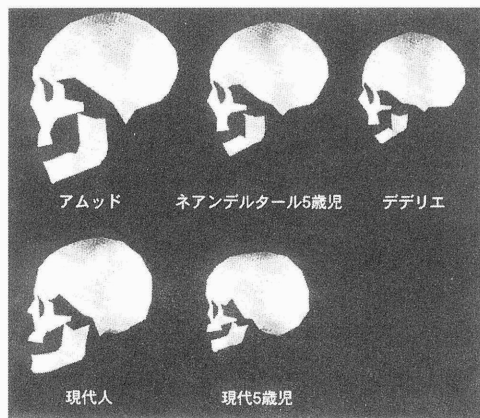
てくれる有名な化石人骨が存在する。イラクのシャニダール洞窟から発掘されたネアンデルタール人である。頭部に怪我を負い、右半身が萎縮し、左目が失われていたにもかかわらず、何年か生きていたと推定される男性の骨が見つかった。こうした重傷を負いながら生存することができた背景には、彼をとりまく社会に、病気のものや老いたものを扶助するという感性が芽生えていたからであると解釈されている。問題はこうした行動を作法とみなすか否かということになる。こうした相互扶助的行動は、より複雑な文化的側面によってかたちづくられる作法とは、やはり異なると考えるべきである。我々が作法という言葉のもとに想像するような定式化されたものがあつたとは考えにくいからだ。

ここで、再び作法の起源を探る困難さに誰もが気づくことになるであろう。すなわち、推定される人間の行動から作法を抽出することは非常に難しいということである。分配Ⅱ作法の起源という図式はある意味では不十分なのであろう。

四、食物分配を重要とする 社会的脈絡の発生

我々が作法とよぶにふさわしい分配の発生には、社会的脈絡においてそれが必要とされる条件が整わなければならない。つまり、特定の個人が受けていた相互扶助的な恩恵ではなく、分配という行為が社会関係の何らかの部分を構成する必要があるということである。作法を実践する側からの見方であれば、作法を守ることによって受けることのできる恩恵は何かということである。これには、ネアンデルタール人もしくは同時代に生きたホモ・サピエンスにおける妊娠および授乳期間の長期化が考える鍵を与えてくれる。

人間は二足歩行の獲得と引き換えに、産道の矮小化という解剖学的構造の変化を容した。このため、人間の新生児は出生時にできるだけ脳容量を小さくすることが要求された。実際、人間の新生児とチンパンジーの脳容量との間にはそれほど大きな違いはない。変化がおこるのは出生後の脳容量の拡大である。人間の子供の脳の発達



シミュレーションによって復元されたネアンデルタールの頭蓋
赤澤威『ネアンデルタール・ミッション』2000年 岩波書店

く、生長を完了したころには、出生時の約四倍である一四〇〇立方センチメートルという脳容量を擁するようになる。一方、チンパンジーの脳容量は四五〇立方センチメートル程度にとどまるという。

脳の著しい生長をともしなう幼児の生育には、相当量の負担が大人、特に授乳という形で子供の成長に関与する母親にかかっていくことはいうまでもない。この傾向は脳容量が急激に増大するネアンデルタール人で特に強いものとなったであろう。実際、妊婦や乳飲み子を抱えたネアンデルタール人が、他の成員から食糧を分けてもらうことなく生きることができたとは考えにくい。

すなわち、それまでの人類社会には見られない分配の関係が、成熟した男女間において生じていたということである。では、その関係は現代人と比べてどうなのか。

ネアンデルタール人の数少ない資料は、子供の養育に付随する男女の連帯が現代人に比べれば希薄だったことを思わせる。それは、ネアンデルタール人の子供が現代人の子供にくらべて著しく速く成長することからうかがえる。筆者も参加したシリアのデデリエ洞窟では、きわめて保存状態のよいネアンデルタール人骨が発見された。形態学的な研究の結果、二歳程度と推定されたこの幼児は、実に現代人の六歳程度の頭がいを持つていたのである。つまり、現代人ほど濃密な「母子」関係を築く時間をネアンデルタール人は持ち合わせていなかった可能性が考えられるであろう。

五、おわりに

結果的にいえば、食事の作法が初期人類の心の中に宿していたことを積極的に支持する結果は今のところ得られていないということになる。食事の作法の起源は、「日本における」や、「ヨーロッパにおける」

といった具合に、具体的な地域や文化に限定されたものを歴史的なアプローチでたどっていくことが無難なのである。

現在の考古学の関心は、もちろん遺跡の解釈から、過去の社会を復原することにあるが、そのプロセスにおいて、「道具立て」を意識していることはいうまでもない。例えば、進化心理学とよばれるような分野は、心のモジュールがどのように準備され、どのように連結されていくかということを進化という観点からとらえることをはじめている。現在、観察される様々な現象から想像をはりめぐらせることを否定はしないが、起源論争に関しては、すでにその段階は過ぎ去ってしまったことは知っておく必要があろう。「起源」という深遠な問題を軽くみてはいけないのである。

参考文献

- 赤澤威『ネアンデルタール・ミッション』岩波書店二〇〇〇
- 石毛直道『食事の文明論』中央公論社一九八二
- 熊倉功夫『文化としてのマナー』岩波書店二〇〇〇
- スティーブン・ミズン『心の先史時代』松浦俊輔 牧野美佐 緒訳 青土社一九九八
- 鵜澤和宏『初期人類の肉食行動に関する最近の研究成果』Anthropological Science(Japanese Series), vol.106, No.1, 1998